

## 農家と消費者の思いを重ねて（命をつなぐチャリティー・ファーム）

3月に開通した「札幌駅前地下歩行空間」でおなじみなのが、産地直売市「北のめぐみ愛食フェア」である。これまでの地産地消の取り組みに加え、東日本大震災の被災者を支援しようと、愛食フェアのブースの一角を借り、「命をつなぐチャリティー・ファーム」が開かれた。さまざまなネットワークから道内各地の農家が参加している。

農家の思いに、消費者の思いを重ね合わせ、北海道から被災地にたくさんの応援したい気持ちを届けたい――。

3月22日から3日間、札幌駅前通の地下歩行空間で「命をつなぐチャリティー・ファーム」が開かれた。道内の農場が生産物を提供し、ボランティアのスタッフとともに販売、売上金の全額を東日本大震災の被災地に寄付するという企画だ。

恒例の産地直売市「北のめぐみ愛食フェア」のブースを借り、米やジャガイモ、タマネギ、葉物野菜、豆類などが並び、初日にはテレビ局の取材もあった。売り場に立った農家は5人ほど。通りがかりの人や、ニュースで知った人などが訪れ、つぎつぎと買い求めていった。

## ネットワークを生かして企画



「たまたま被災地から札幌に避難してきた方が会場にやってきたことや、『親戚が被災地にいる』という人もいましたね。ぼくは、初日だけ駆けつけたんですが、持参したジャガイモは完売しました」

と話すのは、美瑛町で有機農業をやっている村上寿裕さん（34・写真左）。田畑を襲う大津波の様子を目にして、なにかできないかと考えたが、人脈などはなく悶々としていた。

そんななか、会員になっている「農家のこせがれネットワーク北海道」から発信されたメールでこの企画を知り、参加した。

チャリティーのきっかけは、今金町でトマトやアスパラガス、米などを作る曾我井陽充さん（37）がツイッターでつぶやいた、「被災者を応援するために農家がなにかできないか」というひと言。

「こせがれネット」世話人で道農政部職員の今野徹さん（35）がそれを見て動き出す。

「曾我井さんの“資金＝志金（志のあるお金）”という言葉に感銘を受けていたんです。北海道の地域づくりにも“志金”が必要じゃないかな、と。だから、プロが作った農産物を介して、買ってくれた人の思いを義援金で寄せる――そのほうがメッセージになると思ひ

ました」(今野さん・写真右)

農業系のサークルや道産ワインの愛好家グループなどに声をかけた。道内の求人情報誌を制作する会社のスタッフが事務局を買って出る。ブログも立ち上げた。各種メーリングリストやツイッターなどで呼びかけ、わずか1週間ほどの準備期間で開催にこぎつけた。学生や若い社会人からボランティアの申し出が相次ぎ、断るのに困ったという。



「若手の農家に広がり、あっという間に全道各地から25農場が集まりました。開催3日前に締め切りましたが、その後も問い合わせがあった。『なにかしたい』という気持ちを皆さんが持っていたんだと思いますね」



と、事務局の伊藤新さん(42・写真左)が振り返る。北海道アルバイト情報社で「いいね! 農styleプロジェクト」を担当し、小冊子の企画・制作やウェブサイトからの発信、体験農場の運営などを手がける。そこで培ってきたネットワークが生きた。

義援金は約61万円にのぼり、日本赤十字社を通じて被災地に寄付した。

取り組みは、道南へと広がっていく。

数日後、函館市内の若者たちが営む八百屋「夢八」と大学生の農業サークル「famfam」が協力し、同様の催しが行われた。乳製品や肉製品も含め、道南の40農場が生産物を提供した。

「これを皮切りに函館では毎月、売上金の全額を寄付するチャリティー・マルシェを続けます。『夢八』は八百屋を社会貢献活動の場にしていくことも目標にしています。ぼくも、震災のことだけでなく、農産物を通じて食のあり方を問いかけ、農業の喜びを発信していきたい」

と、曾我井さんが力を込めて語る。

ブログやツイッターなどの身近なツールを使ってネットワークをつくり、根づかせる一。そのあたりが支援活動を広げていくポイントになっている。若い人たちの志は高く、頼もしい。

## 岩手の被災地に駆けつけた人も

石狩市の「はるきちオーガニックファーム」の代表・小林卓也さん(32)は、チャリティーを終えた数日後、岩手県内の被災地に向かった。つながりのある札幌のNPO法人「ねおす」が釜石市で被災者の支援活動をやっていると知り、炊き出しをすることにしたのである。

食材や資材、食器などを車に積み込み、苫小牧から秋田港経由で現地入り。メニューは石狩鍋で、120食分の材料を用意して大槌町の避難場所を訪れた。

「20~30食の炊き出し経験はありましたが、これほど多いのは初めて。でも、被災した皆

さんの要望で、最終的には 200 食分になったんです。どの人も憔悴して途方にくれ、母さんたちの手はあかぎれがひどかった。でも、子どもたちは元気で救われましたね」

と、小林さん（写真右）は話す。現地スタッフの応援や、物資の運搬などにも励んだ。

事務局で奔走した伊藤さんも被災地に駆けつけた一人。次のチャリティーをどうしようかと悩んでいたとき、会社として被災者を支援することが決まる。職場の同僚の友人が岩手県出身の北大生。その人たちと陸前高田市に向かった。



道産の加工食品などを持参して現地に入り、支援物資の仕分けや運搬などを手伝った。北大生は、地元のしょうゆ醸造業・八木沢商店の娘さん。津波で工場などが流され、彼女の家族や従業員たちがゼロからの再出発へ奮闘中だった。

「社長さんが口にした、『なにもかも失ったけれど、立ち上がるんだ！』という、地元愛の強い言葉に励まされましたね。復興に向けたビジネス展開の手伝いも頼まれたんです」（伊藤さん）

大震災をきっかけにした、若手農家や「農」に関わろうとする人たちの取り組みは、少しずつ広がりを見せる。

「まだまだ復興には時間がかかり、継続的な支援が必要になってくるでしょう。長いスパンでいろんな取り組みに参加し、小さなことでも支援していきたい」

と、意欲を見せる美瑛の村上さん。

石狩の小林さんは、これからの被災地の復興に心を寄せる。



「津波で塩害を受けた宮城県の農地の復興に対し、農家としてなにができるか考えています。福島県で果樹栽培をしてきた人が北海道に移住したがつている、という情報も知人から聞きました。移住を希望する農家がいるなら協力したい。あとは、東北のお酒を飲むことかな。農作業が終わる冬には、また現地を訪ねたいですね」

被災地に寄せる思いがあっても、なかなか一步を踏みだせない人もいる。これからの夏場は農作業もあるので、そう簡単に現地には赴けない。できることから少しずつやっっていこう――

「チャリティー・ファーム」に関わった人たちの模索が続く。

▲最初に呟いた今金町の曾我井さん